会派視察報告書

周南市議会　参輝会
代表　福田　文治

令和5年1月17日（火）から1月19日（木）まで、会派参輝会で下記内容にて愛知県名古屋市、三重県津市、大阪府岸和田市、泉佐野市に訪問しましたので、その概要を報告します。

記

1．日　　時　　令和5年1月17日（火）から1月19日（木）　2泊3日

2．視察先　　1月１７日（火）
愛知県名古屋市「東山動植物園について」

1月１８日（水）
三重県津市「ボートレース津について」

1月１９日（木）
大阪府岸和田市「岸和田城、だんじり会館について」
大阪府泉佐野市「ふるさと納税について」

3　出席者　　福田文治、長嶺敏昭、青木義雄、細田憲司

※日程、所感は別紙のとおり

参輝会行政視察《愛知県　名古屋市》

質問・答弁及び所感

長　嶺　敏　昭　議員

視察事項　東山動植物園

事前質問

1、動物園運営に対する名古屋市の基本的考え方は。
2、会計方式、予算規模、収支状況は。
3、市民や議会からの要望や提案は。
4、民間活力導入への考えや実例があれば。
5、来場者増への取り組みは。
6、スリランカゾウの繁殖を目指す徳山動物園へのアドバイスは。

答　レクチャー棟でまず動画やパワーポイントを用いて事前質問事項も織り交ぜながら総括的な答弁を頂いた。（座学　約60分、現地見学　約90分）

問　**周南市で「ゾウ会議」があったと聞いているが、内容はいかがだったか。**

答　12月に周南市で開催され、次回引き受けが東山動物園でもあり、多数が参加した。
　ゾウに関しては、2頭の繁殖の実績をお話しいただいた。また、徳山動物園のゾウのパドックなどは新しく羨ましいくらいの施設であった。との話があった。（ゾウ会議で徳山動物園を訪れた職員もあり、座学、園内視察見学に同席、説明をいただいた。）

所　感　（東山動物園副園長　獣医師　茶谷公一、緑政土木局　参事　山盛　康　他）

ドーム球場18個分、東京上野公園動物園に次ぐ規模を誇る東山動物園は、来場者もコロナ禍等で減少しているとはいえ230万人もある名古屋市の観光施設であり、市民の憩いの場である。重要文化財に指定されている建造物である温室がある植物園や遊園地もある歴史のある施設で、正式には「東山動植物園」という。全国でも例の少ないスリランカゾウの繁殖実績が2頭あり、コアラの飼育、イケメンで人気のニシゴリラの「シャバーニ」の話題性があり賑わっている。チンパンジー舎、レッサーパンダ舎の現代風展示など東山動植物園再生プラン」に基づき計画的に整備され、これからも獣舎のリニューアルの計画もあるようだようだが、見るからに古い歴史ある動物園の様相が残る施設でもあった。園内の売店施設等では提案による民間事業者が経営している商業施設も複数あるようであった。

東山動植物園とはスリランカゾウの出産、飼育の先進地として、今後長く周南市とのお付き合いと指導を得たい動物園である。

六合会会派視察《令和５年　１月／８日　》

質問・答弁及び所感

福田　文治

視察事項　三重県津市　ボートレース津

問
答
問
答
所感 ボートレース津は令和４年に70周年を迎え施設の老朽化が進み計画的に改修工事を進めている、視察時競技棟建設、旧競技棟の解体、渡橋の建設を行っていた。事業としては、平成２年度には過去最高の５０３億円の売り上げを記録している。 平成３年度、２４競艇事業全体の総売り上げが２兆２千億円をピークに長期低落に至り平成22年度には8400億円にまで落ち込んだ。各施行者も「身売り」まで考えざる経営状況であった。２４の施行者協議会は平成21には法定後納金比率の減率に成功しボートレース振興会が設立され、ミニット、オラレなどの場外舟券売り場が各施行者売上増強のため開設して行った。平成23年度に津インクル、27年度名張市、28年度養老町に場外発売場を開設した。また平成14年度にはツッキードームをオープンし女性や子供の来場増強を狙い開場した。 モーニングレース、ナイターレース、電話投票など数々の経営努力がみのりボートレース業界全体の売り上げが上昇し令和３年度には２兆４千億に届くまで伸びてきた。 津競艇も令和２年度には最高売り上げ563億円を更新し３３億円を一般会計に繰り出し津市に貢献を果たしている、本状の施設の老朽化、本状のみの時代から電話、場外発売等で本状設備のリニューアルが必要である、光熱費の増大従事員の配置など経費削減を目指すべきである。 ボートレース徳山今がピークであり今のうちにできる改修等を実施し、将来的には光熱費、人件費など経常経費が如何に削減するかの時代が来ても十分対応できる施設、設備を準備しておく必要がある。

参輝会行政視察《大阪府　岸和田市》

質問・答弁及び所感

長　嶺　敏　昭　議員

視察事項　岸和田城「八陣の庭」、だんじり会館

問
答
問
答
所　感　（岸和田ボランティアガイド　副会長　阪田　幹） 事前にボランティアガイドを予約し、2時間ほど施設をガイドして頂いた貴重な視察となった。岸和田城内にある「八陣の庭」を見学した。この庭は、昭和の雪舟とも呼ばれた作庭家であり庭園研究者であった重森三玲氏が昭和28年に設計・作庭した従来の石庭のイメージとは異なる非常にユニークでアートが感じられる石組が見られる庭園である。同氏の手掛けた庭では京都東福寺の本坊庭園の「市松の庭」などに続き、国指定の名勝に指定された三国志の諸葛孔明に由来する八陣の構えをイメージして作られた庭である。フラットな平面での鑑賞も見ごたえがあるが、当初より上から俯瞰してのイメージも描いての作品で岸和田城天守閣よりの眺望には感動させられる思いであった。令和2年、同氏晩年の作品である周南市鹿野漢陽寺の石庭群も登録記念物には指定がなったものの、さらに国の名勝へのランクアップに期待することから、是非とも訪れてみたい庭園であった。 岸和田城に隣接した場所にある「だんじり会館」の見学では、関西、四国地域には多くの祭りだんじり（だし）が継承されているが、「だんじ」りと言えば岸和田と言われるほどの賑わいを誇る。施設内では寄贈された数台の「だんじり」の展示やワイド画面での映像や3D映像が見られる設備もあり、ボランティアガイドの熱心な説明からも地域の文化に対する誇りが色濃い伝統文化施設であった。

委員会行政視察《大阪府　泉佐野市》

質問・答弁及び所感

長　嶺　敏　昭　議員

視察事項　ふるさと納税

問
答
問
答
所　感　（政策監　兼成長戦略室室長　阪上博則） ・やる気のある有能な人材（例：　阪上博則　監）が視察が殺到するような自治体には必ず存在する。総務省とも対峙する自信と力強さがあった。 ・返礼品の充実は、クラウドファンディングなどでプロジェクトの立ち上げに泉佐野市も積極的に関わり、補助金（5000万円集めれば2000万円）の手厚い支給で100％事業化しており、寄付金増と共に地場産業の育成に繋がっている。また、他市（京丹後市）に職員を派遣するなど一見次元が違うと思われる関連事業も展開している。 ・ふるさと納税の収納、活性化には、キャッチーなサイト運営が絶対的に必要！ ・ネット上の画像が命！クリックしてくれなければ無駄使いに等しい！ ・周南市のサイトにはキャチコピーも少なく、やる気が感じられない！ ・サイト運営会社の選別が必要！JTBは良くない。替えろ！ ・ラインナップ増もだが、カテゴリー増が大事！同一サイト内で色々物色できるように！ ・周南市で政策監　兼成長戦略室室長　阪上博則氏に研修講演を依頼してはどうか？

泉佐野市　視察《　　》

質問・答弁及び所感

寺本 義雄 議員

視察事項　ふるさと納税について

問	現在どのくらいの人数でふるさと納税業務を行っているか
答	12名体制で行っている
問	財源としてのもちだしは
答	現在クラウドファンディングにより資金調達しているので市としての一般財源からのもちだしはない
問	阿南市はJTBに業務を委託しているが、これは正しい選択なのか
答	JTBは200近い自治体をうけているが、京都市や名古屋市など大都市に力を入れており、おすすめできない。小さくともキメ細かな対応できる業者が望ましい

所感　泉佐野市のふるさと納税件数は令和3年度594,137件およそ113億で寄附額は全国第5位である。平成30年には497億をたたき出したこともあり（H29～令和元年まで3年連続日本一）まさに「ふるさと納税のまち」泉佐野市として全国に有名なまちとして知られている。全国的に有名な特産品がある市ではなく、ごくごく普通の市でありながら、めざましい努力と工夫と行動でここまで築いてこられたことに先進的という言葉を加えて奇跡的といってもいいほどすばらしく取り組まれている。地方対首都圏の戦いであるとして泉佐野市にとって足かせ制度として市当局が明確に位置づけている。一方で阿南市のふるさと納税は2,300件およそ8000万円という状況であり比較だけするのは、とても及ばない情けない状況にある。市当局での位置づけはどうなのか？阿南市の状況はあまりにさみしい現実だ。

会派視察
質問・答弁及び所管

議員名　細　田　憲　司

視察事項　　**ふるさと納税（泉佐野市）**

問　当初、何名体制でスタートしたのか。

答　当初、１名体制でスタートした。

問　事業の成功を確信するような転機、きっかけはあったのか。また、それは、どのようなことであったか。

答　ピーチ・エア航空への出向が大きなヒントとなった。ここで得たアイデアを生かし、右肩上がりへとつなげた。

所感

担当室長の阪上氏には、公務員とは思えない民間企業の「トップセールス」のような人をひきつける魅力と自信にあふれる巧みな話術があった。

人口１０万人を切り、有名な特産物が多数あるわけでもないにもかかわらず、３年連続１位のふるさと納税額を獲得したり、様々なアイデア、創意工夫で新商品を次々に生み出す「源泉」は一体何のか。それは、泉佐野市は数年前まで財政が大変厳しい状況にあり、恐らくこの時に感じた「危機感」が今日のふるさと納税で常に上位の成績を収めることにつながったのではないかと思われた。

新たな商品がヒットすれば当然民間も潤い、雇用も増え、ウィン・ウィンとなる。本市の現状と１００倍以上の開きがあり、本市における抜本的な改善が必要であると強く感じた。「官民連携」とはよく言うが、本市においても真に民間の力をアイデアに置き換え、努力してく、そうした熱意のある職員の登場を望む。